

## パリから見えるこの世界

### *Un regard de Paris sur ce monde*

#### 第49回 ストウナンス、そして学生であるということ

「ディプロムは文化の不倶戴天の敵であると躊躇なく断言する」

——ポール・ヴァレリー

大学院を終えたのを機に、それ以前にはわたしの中になかったもの、その意味では「わたしの発見」となる、少し大きなテーマについてこの4月から書いてきた。この時期にやっておかなければ、8年超の経験が齎したものを明確に意識することなく、以前からそこにあったものとして歩みを進めることになるのではないかと危惧したためである。今回はその一段落として、大学院を締めくくることになったテーマとそれを基にしたストウナンスという審査会での経験を振り返り、改めて学生の意味するところに考えを巡らせてみたい。

マスターからドクターに入る時もフランスに渡る時と同じように(240巻6号)、劇的な展開が待っていた。マスターで出会った情報量が余りにも膨大だったため、大学を休んで学び直そうと考えていた。そんな折に話すことになったのが、マスターで医学倫理や統計学を用いた思考についての講義を担当されていたパリ大学ディドロのアラン・ルプレージュ(Alain Leplège)教授であった。講義の後の雑談で聞いた「哲学に必要なのは、好奇心と時間(暇)と自由である」という言葉が印象に残っていたからだろう。わたしのプロジェを話すと、鉄は熱いうちに打てという言葉があるように、ここで休むのは勧められない、直ちにドクターに進むようにとの返事が返ってきた。わたしのプロジェはドクター1年目にやればよいということで、ドクターに進むことになった。ほんの一瞬の決断であった。何とその日は大学院の申請締め切り前日だったのである。

そのような背景があったため、最初の2年くらいは月に1度の頻度で指導教授とのランデブーをやっていた。しかし、これからも科学と同じように、一つのテーマを掘り下げていくやり方を続けることに抵抗を覚えたからではないかと思う。そのためにこちらに来たのではないという思いがどこかにあったからだろう。次第に大学から足が遠のき、永遠の中を飛ぶが如くこの世界に身を晒す生活へと向かって行った。いま

思い返せば、そのような学生のままの生活を理想としていた可能性もある。しかし、この世に理想郷はない。その状況が変わったのは、2014年の夏ではなかっただろうか。大学の方針が変わり、ドクターは6年以上大学にいられないことになったと聞かされたのである。それでもわたしの心は変わらなかった。こちらに来る前に予想していた以上のものをすでに吸収できたと感じていたからだろう。ただ、指導教授の考えは違った。わたしが卒業できる条件は2015年の末までにスートゥナンスが終わっていることなので、その2か月前までにテーズの提出が終わっていないと伝えられた。この穏やかな圧力がなければ、わたしのその後はあり得なかっただろう。

テーズのテーマは科学と哲学を結び付ける「免疫の形而上学」とした。科学者は考えないテーマであり、寧ろそんなことを考えて一体何になるのかと言って拒絶するテーマになるだろう。しかし、それ故、哲学こそ科学がやらない頭の使い方をしなければならぬとその頃までには考えるようになっていた。「科学の形而上学化」の実践である。人間が古くから持っているものだが、現代では否定され忘れ去られているかに見える思考の世界を覗いてみたいという強い好奇の心がそれを支えていたはずである。指導教授も特に異論を差し挟まなかった。しかし、それは手探りの中で進められる、やればやるほど不備が目に入る苦しみに満ちたものになった。最終的な形が出来上がったのは締切りの1分前。それまでの数時間は全くの異次元に入り、つま先立ちでロープの上を渡っているような、それをやっているのは自分でないような、これまでに経験したことのない異常な心理状態の中において、何度出すのを止めようかと思ったことだろうか。すべてが終わった時には、これは奇跡としか言いようがないと感じていた。

審査委員は指導教授と相談の上、イギリスはケンブリッジにあるベイブラハム研究所の免疫学者ジェフ・ブッチャー (Geoff Butcher) 教授、パリ大学ディドロの免疫学・医学の歴史家アン・マリー・ムーラン (Anne-Marie Moulin) 教授、医学・生物学の哲学がご専門のコレージュ・ド・フランスのアン・ファゴ・ラルジョー (Anne Fagot-Largeault) 教授、そして免疫学をはじめとした生物学の哲学を研究しているボルドー大学のトマ・プラドゥー (Thomas Pradeu) 講師にお願いすることにした。さらに、テーズを読み、それがスートゥナンスに値するか否かを評価し、他の審査委員と候補者に報告する役 (rapporteur) をブッチャー教授とプラドゥー講師にお願いした。そして、スートゥナンスは2015年12月7日に決まった。



**ストゥナンス後の審査委員の諸先生**

(右から) ジェフ・ブッチャー教授、アン・マリー・ムーラン教授、  
アラン・ルプレージュ教授、アン・ファゴ・ラルジョー教授、トマ・プラドゥー講師  
(2015年12月7日)

ストゥナンスはほぼひと月前にパリで発生したテロの影響が色濃く残る大学で行われた。始まる前に委員長を合議で決めるのが慣例のようで、ムーラン教授に決まった。まず、候補者が30分ほどで теззの内容を紹介した後、審査委員一人当たり30分ほどの質疑応答が行われる。わたしの場合、委員は5名だったが、7-8名に及ぶと体力勝負の長丁場となる。西洋の思考の中に日本人のそれとは明らかに違う何かを感じてきたが、ストゥナンスでは彼らの精神の中に組み込まれているように見える論理(ロゴス)と批判精神(エスプリ・クリティーク)を改めて感じるようになった。そのために形を作るのではない、滲み出てくるものである。日常のすぐ横にそれがあるという印象である。どこまでも明快に言葉(ロゴス)を使おうとする精神の表れである。文化の中にそれがあり、教育によって育てられるのだろう。今回、フランス人4名とイギリス人1名の構成だったので、以前に触れた英仏の違い(258巻8号)も感じる事ができた。直にこういう精神と対峙していると、わたしは日本人であることを意識せざるを得なくなる。

質疑応答では実に多様な思索を刺激する指摘があり、悦びながらそこに加わっていた。わたしの文章を読み、そのことに反応して彼ら自身の世界を開陳してくれるのである。これから思索を深める上で示唆に富む多くの言葉に触れる事ができたことは幸いであった。これらのクリティークは теззを書いていなければ聴く事ができな

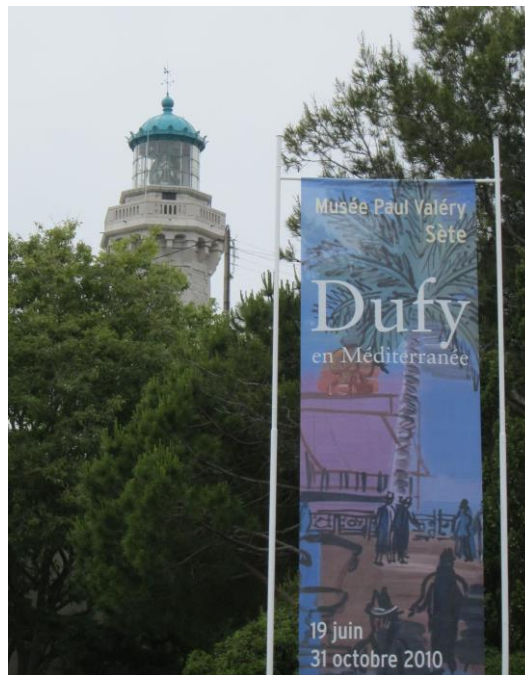
かったものである。 тезезを書いたことで、それまで見たこともない新しい世界がわたしの前に広がったのである。これほど素晴らしい機会はあるだろうか。

今回の тезезのポイントになるだろうクリティークを一つだけ紹介したい。それは二人の委員が読後に浮かんだという「孤独の戦士」という言葉と関係してくる。そこに込められた意味は、ドクター最後の数年間を隠遁の中にいた者にはよく理解できるものであった。恰も孤独の戦士のように哲学をやるということは、自分の中から生まれたものだけを頼りに思索を進めるところがあり、そこに自由を見て、ある意味では羨ましいという含みがある。しかし、それは同時に、他の人の仕事を参照することなく進めることから、独我論の世界に陥る危険性があるという批判にも繋がる。これは現代の科学的やり方には合致せず、学界に生きる哲学研究者を育てる立場に立てば避けられない指摘になるのだろう。しかし、そのような批判は覚悟の上で、敢えて科学的なやり方に抗してやってみたかったのである。その評価を聴くことでこれからの道行がより明確になってきたという点では、敢えて試みてよかったというのが率直な感想であった。

スートゥナンス後、直ちに評定が下される。室外で 10 分ほど待っていると呼び戻され、評価を聞かされた。その結果、ソルボンヌ大学パリ・シテ (Université Sorbonne Paris Cité) の博士となった。この大学はパリにある十数か所の大学と研究所を纏めた研究・教育コミュニティとして 2014 年に設立されたものである。おそらく、フランスでも世界的に発表される大学ランキングを無視するわけにはいかず、ビジビリティを求めてのことではなかったのだろうか。この春、大学から学位授与式のビデオが送られてきた (<https://www.youtube.com/watch?v=6wxoyDlbQeg>)。その大半は世界各国から集まった博士になったばかりの人たちの経験を語る時間で占められ、未来に向けての希望を感じることもできた。 commencement とはよく言ったものである。そして何よりも、人間が前面に出た和やかで温かみのある式であることに目を開かされた。

2005 年 11 月、わたしはフランス国民教育省のフランス語資格試験 DALF-C1 を受けた。そこで今回のエピグラフとしたポール・ヴァレリー (Paul Valéry, 1871-1945) の言葉に出会った。彼のディプロムやバカロレアに関するほぼ 80 年前のエッセイが取り上げられていたからである。その中で、次のようなことが論じられていたのを印象深く記憶している。ディプロムが幅を利かすようになるということは、それが経済的理由と結び付いてくることで、それに伴って教育がますます弱体化する。ディプロ

ムができた瞬間から学習の目的が何としてもディプロムを獲得することになり、精神の形成ではなくなるからである。ラテン語やギリシャ語、幾何学などを学ぶことではなくなるのである。資格がものを言う社会とそれに伴う教育のコントロールは、行動を墮落させ、公共の精神、いや精神そのものを駄目にするという論旨であった。わたしのいまの言葉で言えば、「そのものだけのために」学ぶという無垢な精神状態が維持されず、「何かのために」という経済に支配される精神状態になるということだろうか。その意味で、わたしの二度目の学びはヴァレリーの言う真の学習の中にあっただと言えるかもしれない。ただ、終わって暫くすると、この道を自らの足で歩き始めてよいのだという許可証を貰ったような感覚が生まれたことも確かである。それが使命感のようなものとも繋がる微かな束縛を伴って現れるとは、想像もできなかったことである。



**ポール・ヴァレリー美術館**  
ヴァレリー生誕の地セット(Sète)にて  
(2010年6月19日)

ストゥナンスの最後に審査委員長のムーラン教授が「これからのプロジェは？」と問い掛けてきた。その問いに答えた後、「あなたは永遠の学生ですね」とのコメントが返ってきた。これはどういう意味だったのだろうか。この8年ほどの間、確かに学生という立場にあった。若い人たちと同じ平面にいて、全く違和感を覚えることはなかった。それはおそらく、以前と何ら変わらない精神状態にあったからではないか

と考えた。つまり、それまでも専門家になること、それらしい人間になることをどこかで拒否し、学生のような気分ではいたのではないかということに気付いたのである。それは評価する側ではなく、評価される側に居続けるということでもある。その上で、マスターの時に浮かんだ疑問がある。もし元科学者としてこちらに来て、同じような背景の人たちと付き合いながら自分なりに考えを進めてきたとする。その時、果たしていまと同じ低い視線から、ある種の謙虚さと学びの心をもってこの世界を観ることができていただろうかという問いである。それは難しかったのではないかというのが結論であった。二度目の学生に実際になることによってしか、その視線を獲得することができなかったと思われたからである。

学生という言葉とともに改めて省察してみる。すると、次のようなことが湧いてきた。学生に限らず、われわれは日々何らかの知識を手に入れている。自らを振り返れば、ほとんどの場合、それらの知識を「知識として」頭に入れていた。自らの存在と直接関わることなく、離れた場所に別物としてそれは蓄えられていた。それを使う者にとっては付加物にしか過ぎない状態で、「何かのために」使われる技術にも通じるものとしてそこにあった。意識の第二層に留まるものとも言えるだろう。そのような存在との境を明確にするものとしての知識ではなく、その存在の中に組み込まれ、溶け込み、一体化するような知。存在そのものに深い影響を与えるような知。学ぶということは自らが変わることだという意味における知。そのような知を得ようとする者、そのような学びの生を生きようとする者。そのような人をわたしは学生と呼びたい。これは二度目の学生生活が「何かのため」という要素を欠いたものであったがために到達できた認識ではないだろうか。しかし、さらに引いて見ると、これは学生だけを定義するものではなく、人間としての一つのあり方を指し示しているようでもある。

2015年1月、それまでの数年間の蓄積を失った後、3度目になるシャルトル (Chartres) を訪れた。それまで何度もその前を歩いていたが、その存在を意識することはなかった。しかし、その時初めてそこに足を止めた。それはベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の弟子で、第一次世界大戦中にドイツ軍に殺されたフランスの詩人シャルル・ペギー (Charles Péguy, 1873-1914) の記念碑だった。スートゥナンス終了後、審査委員のコメントを纏めた10ページほどの報告書が届いた。その中にはスートゥナンスでも出されたテーゼについての多方面からの分析と批判、これからの指標となるだろう指摘が溢れていた。わたしの宝となるものである。そこに予想もしなかった審査委員長の言葉を発見して驚くことになった。それがシャルル・ペギーの言

葉だったからであり、彼がデカルト (René Descartes, 1596-1650) を評して語った「これほど素晴らしい一歩を踏み出したこの騎士」(ペギーの言葉では「フランスの騎士」となっている) という言葉とともに祝意が記されてあったからである。過分なその言葉は、問題はこれからなのだとおっしゃっているように見える。同時に、これからへの静かな力を与えてくれるようにも感じる。苦しみながらのテーズとストゥナンスは、彼らの批判精神とこのような素晴らしい言葉に触れる幸運を味わうためのものだったのだろうか。そしていま、新たな出発点に立ち、これからも学びの中の生を生きる者として歩むことになるのだろうか。そんな思いの中にある、すっかり秋らしくなったパリである。



シャルル・ペギー像

シャルトルにて

(2015年1月27日)

(2016年9月7日)